



人間万事塞翁が馬

藤澤 康弘

愛媛大学大学院医学系研究科皮膚科学教授

皆さんは自身の進路をどのように決められたのでしょうか？ 私が卒業した平成10(1998)年は皮膚科含めたマイナー系は即入局という時代だった。入局する前に内科で2年間研修をしたい、と当時の皮膚科教授だった大塚藤男先生に伝えに行ったところ「いやー、2年後に戻ってくるところはないかもね～」といわれて泣く泣く大学での研修をスタートさせた。

医者3年目から国立がんセンターで3年間の研修をさせていただいたが、これも「来年、がんセンターね」という大塚先生の一言で決まった(本当は日立総合病院に行ってゴルフをやりたいかった)。このときの経験がなければ今の自分はいくらいの大きなチャンスをもたらしたのだが、当時はまったく理解できずにその日は友人と飲んだくれたのを覚えている。

東京での研修を終えてから大学で2年間、思いきり臨床を経験させていただいてから大学院に進学したが、これも自分の希望ではなかった。実際には臨床の忙しさに燃え尽きて「大学なんて辞める」と医局で大騒ぎしていたところ、医局長に「いいから大学院に行けよ」と説得されて決まった。このとき血液内科のラボで研究させていただいた樹状細胞を用いた癌の免疫治療の研究は、その後の免疫チェックポイント阻害薬の研究につながり非常に役に立ったのだが、そのときはこのような未来が来るなど思いもしなかった。

大学院卒業のタイミングで思いがけず米国での留学案件が舞い込み、意気揚々と大塚先生に留学の許可をもらいに行ったところ「来年から講師ね」といわれて断念。このときは本当に悔しかったが、いま思えばちょうどメラノーマの領域で免疫チェックポイント阻害薬の臨床試験が始まった時期で、留学に行っていたらその大事なタイミングを逃していただろう。その後、母校の教授選で負けて大学でのキャリアは終わったと思ったが、いろいろな人の助けもあり愛媛大学皮膚科学教室の運営を任せていただくことになった。ここは形成外科とのハイブリッド教室で、むずかしい再建や大きな手術も形成外科の先生に協力してもらえるため、皮膚腫瘍に取り組むには本当に最高の環境である。

一寸先は闇、人生においてなにが最善の選択かは誰にもわからないし、意に反する状況だと思っても実は後になってみればそれがよいターニングポイントだったということもある。問題はその意に反する状況のときに気持ちを切り替えて前に進めるかどうかである。自分は信頼できる家族や仲間のサポートがあったから「人生万事塞翁が馬」と振り返ることができるが、サポートがなかったら今の自分はいない。若い先生方には長期的視点で物事を考えて判断すること、そして何よりも信頼できる仲間を増やすことの重要性について伝えていきたい。